

コロナ禍の自由—ポスト・コロナの自由主義へ

山口県立宇部高等学校 2年 小川珠礼

二度目の緊急事態宣言。また自粛を強いられる日々が始まる。にもかかわらず、私は自分の表情筋が敏感に反応するのを見逃さなかった。あの自由な時間がやってくる。無意識のうちに、身体がそう反応していたのだと思う。私はこれまでの人生で、自由などということを感じたこともなければ、考えたこともなかった。ところが不思議なことに、新型コロナウイルス対策のための緊急事態宣言によって、初めて自由を感じることができたのだ。

周囲の大人たちはいう。コロナ禍で自由が奪われていると。はたしてそうなのだろうか？ たしかに、ある程度の行動制限が強要され、これまで当たり前に行えたことができなくなったという側面はある。しかし、コロナ禍以前もできないことはたくさんあったはずである。その時、自由が奪われているとか、抑圧されていると感じたことなどなかっただろう。

水や空気と同じで、人々は当たり前のものを失って初めて、その存在の大切さに気づくものである。自由はまさにそうした当たり前のものだったのだ。ところが、コロナ禍によってその大切さに気づく機会がもたらされた。コロナで自由が奪われたなどと騒いでいる人間は、表面的な変化にのみ目を奪われ、本質的な問題に気づいていない。

よく考えてみれば、現代社会の自由はすでに変質してしまっていた。遅くとも、福祉という概念が市民権を得、人々が生きるのではなく生かされるようになった頃から、かつて有していたはずのいわば「本来の自由」は、「囲われた自由」へと飼いならされてしまっていたのだ。

フランスの現代思想家ミシェル・フーコーが唱えた生権力は、まさに福祉によって人間を飼いならす新たな権力構造を暴く概念装置であったし、逆にアメリカの政治哲学者ジョン・ロールズが説いた現代リベラリズムは、福祉によって初めて人々の自由が実現されることを論じる政治思想であった。福祉社会を否定的にとらえるにせよ、肯定的にとらえるにせよ、現代の自由はもはや「囲われた自由」として、ある程度の制限のもとに保障される人権の一つにすぎないのである。その制限の程度は、社会状況によって変わってくる。

普段は、勤め人ならせいぜい年一度の健康診断が課される程度の制限があるくらいだが、ひとたび緊急事態宣言が出されれば、文字通り部屋の中に「囲われた自由」しか与えられないというわけである。したがって私たちが論じるべきは、「コロナ禍の自由」からの解放ではなく、むしろ現代福祉社会が覆い隠してしまっている「囲われた自由」からの解放にほかならない。なぜなら、「囲われた自由」の心地よさは、健康至上主義の名のもとに増殖し続ける全体主義的な監視社会をも許容してしまいかねないからである。

結局私たちは、コロナ禍で自由が制限されたことを奇貨として、自由の抑圧がとうの昔から起こってきた事実こそ目を向けなければならないのだ。そうして、その状況から脱する方策を議論することで、ようやく「本来の自由」を取り戻すことができるのである。

もっとも、長らく福祉社会によって守られてきた「本来の自由」は、もはや耐性菌を失った弱い存在に成り下がっている。だからこそ、このコロナ禍を利用して、強靱なものへと鍛え直す必要がある。あたかもウイルスによって耐性を得るかのごとく。

具体的には、全体主義的な抑圧、剥き出しの自由同士の衝突、自由と平等との対立……。歴史上、自由という概念が経験してきた様々な試練を、今一度現代の文脈において経験する必要があるだろう。「囲われた自由」の囲いを取っ払い、自由を解き放つ。その時再び、自由の概念は新たな姿となって立ち現れることだろう。私たちはだから、歩みを進めねばならない。ポスト・コロナの自由主義へ。